



## 数理の窓



### 野鳥観察のデジタル的進化

MIRANDA

「eBirdではここでズグロカモメが見られると載っているけど、どこで見られるの?」「日本ではまだ重い野鳥図鑑を持ち歩かないといけないから不便だわ。アメリカならスマートフォンでMerlinを使えばすぐに調べられるんだけど」。来日する海外のバードウォッチャー達の声である。

米コーネル大学鳥類学研究所と全米オードユボン協会（日本野鳥の会に相当）が提供するeBirdやMerlinは、従来ローカルでアナログだった野鳥観察を一挙にグローバルかつデジタルなものへ変貌させた。野鳥観察はフィールドに出かけて、双眼鏡や望遠鏡でその土地・その季節の野鳥を観察し楽しむ趣味である。しかし、その手法が劇的に変わりつつある。

eBirdはバードウォッチャーに、世界のどの土地でどの種が観察できるかという情報をスマートフォンで提供する。そして観察の結果はeBirdに登録することで蓄積され、eBirdのビッグデータが、今度は学術研究や環境保護・趣味としての野鳥観察に利用されるというクラウドサービスである。

eBirdは現在、全世界51万人が利用し、登録されている野鳥観察のチェックリストの数は4千万件を超える世界最大規模のツールとなっている。

また、Merlinはデジタル図鑑として使える他、種を特定できない場合、野鳥の写真をアップロード

すれば、AIが種を判別してくれるという手軽なモバイルツールである。

このクラウドとAIというデジタル化によってeBirdに蓄積されているデータを活用し、例えばNASAの地図ソフトと連動させることで渡り鳥がどのように移動していくのかをビジュアル化して分析するということも実現した。またeBirdのデータ分析により、気候変動による特定種の生息域の拡大や移動が明らかになっている。これらは学術研究での再利用の好事例といえるだろう。

今も昔も自然観察を楽しみたい、という人間の欲求に変わりはない。しかしクラウド・ビッグデータ・AIというデジタルツールを使うことで、ローカルだけでなく、グローバルに同じ趣味を持つ仲間と情報を共有し、会話を楽しむという新しい世界が生まれたのである。全世界の人が同一のデジタルプラットフォームを利用することで、「世界標準の楽しみ方」が急速に進んでいく。とりわけ若い頃からデジタルに慣れ親しんできた若い世代がアウトドアを趣味にすると、そこでは今と違ったデジタル世代の楽しみ方が主流となっているに違いない。

“ローカルからグローバルへ”、“アナログからデジタルへ”という流れは、アウトドアの世界でも着々と進んでいる。

(平中 直也)